

前回取り上げた「知恵」は神さまに属するものであり、神さまから与えられる聖霊の賜物だと聖書は書いています。では「知識」は、どのようなものだと書かれているのでしょうか。

創世記 2～3 章には、神さまが食べてはいけないと命じた「善悪の知識の木」の実をアダムとエバが食べてしまった物語が載せられています。二人は実を食べることによって自分たちが裸であることを知り、神さまの前から隠れてしまいました。彼らの目が開け、善悪を知る「知識」を得たのです。

旧約の預言者たちは、神を知ることが大切であると説きました。そのこともありユダヤ教では、律法の中にこそ神さまのみ心を知る「知識」があると考えられています。

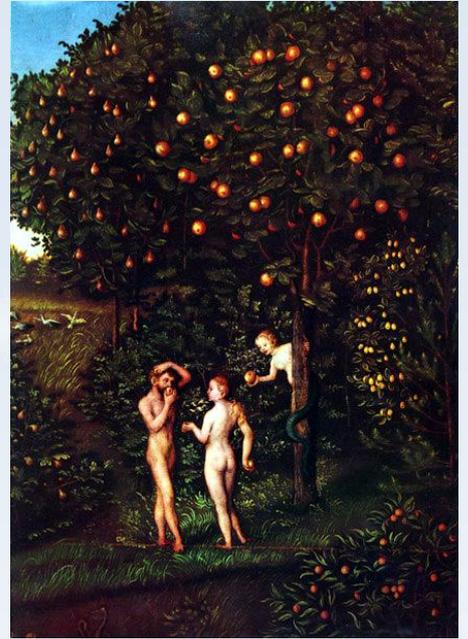
また神さまと救いに関する直接的・神秘的認識を、自らの力で得ようとするグループもあらわれました。「知識」という語のギリシア語は「グノーシス」ですが、自分の力で人間の本質や神さまについての知識・認識に到達することを求める「グノーシス主義」という思想も生まれていきます。

パウロは、神さまへの信仰こそが神さまを知ることにつながると言いました。知恵が神さまから与えられるものであるのに対し、知識は主体的に、そして信仰的に得るものだと言うのです。

知識とは、神秘的な体験によって得られるものではないとも言います。またわたしたちの知識は一部分であり、いずれ廃れるものであることも覚えておきたいと思います。

神さまは、部分的で不完全な知識しかないわたしたちを、イエス様によって信仰と希望と愛に導いてくださるのです。

次回は「償い」です。楽しみに。



「善悪の知識の樹」

ルーカス・クラナッハ

(1472～1553年)

愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。

(コリントの信徒への手紙一 13章 8～9節)

